

P20

混合歯列期に咬合調整を行い反対咬合が改善した1例

○住真由美, 飯島静子, 丸山陽市*,
(長崎大・医歯薬・矯正歯,

*長崎大学病院総合歯科・矯正歯)

【緒言】

乳歯列期からの反対咬合については自然治癒するものを含めて経過観察を行う必要がある。混合歯列期まで継続した反対咬合については前歯の萌出や上下顎の正常な成長に影響が及ぶため、早期の前歯部被蓋改善を得ることが重要である。

今回、乳歯列期に反対咬合を呈する女兒への経過観察中に、乳前歯に咬合干渉を確認し、咬合調整を行うことで前歯部被蓋改善および上顎骨の成長変化が認められた1例について報告する。

【症例】

患者：初診時年齢 3歳5か月 女兒

主訴：反対咬合

家族歴、既往歴：特記事項なし

顔貌所見：正貌 (symmetry) 側貌 (straight type)

口腔内所見：カリエスなし

反対被蓋範囲：
$$\begin{array}{c|c} \text{BA} & \text{ABC} \\ \hline \text{CBA} & \text{ABC} \end{array}$$

overjet : 2mm overbite : -2mm

正中のずれ：上顎に対して下顎が左に1mm偏位

【処置および経過】

初診時に強制的下顎最遠心位が切端位であった。前歯部被蓋状態はoverbiteが大きく、上顎左側乳犬歯を反対被蓋範囲に含んでいた(図1)。これらの所見から前歯部交換完了時に第一期矯正治療が必要となる可能性が高く、自然治癒しない可能性が高いことを保護者に説明を行った。処置については強制的下顎最遠心位において切端位でBに干渉があるため、咬合調整を行った(図2)。Bの脱後は強制的下顎最遠心位においてC|Cで干渉があるため、同部位の咬合調整を行った(図3)。その後も咬合干渉と永久歯交換を注意深く観察し、咬合調整を繰り返し行いながら定期管理を行った。

7歳2か月時に $\overline{1|1}$ 被蓋の改善および上顎骨の成長変化が認められ、反対咬合の改善に至る結果が得られた(図4)。

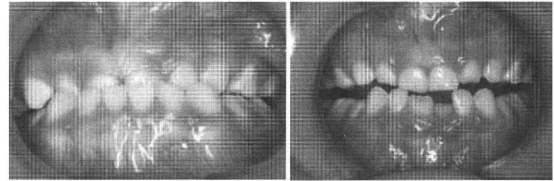


図1：3歳5か月

図2：5歳3か月

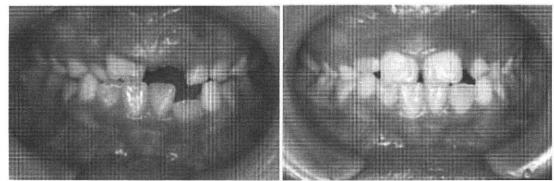


図3：6歳4か月

図4：7歳2か月

【考察】

乳歯列期の反対咬合には骨格性、機能性および歯性のものがあり、機能性および歯性反対咬合は自然治癒する可能性が高く、自然治癒率は6割に近い状態であると報告されている。自然治癒する条件として①上顎乳犬歯に反対咬合が及んでいない、②強制的下顎最遠心位がとれること、③overbite2mm、overjet-2mm以下であることがあげられる。今回の症例においては上顎乳犬歯まで反対咬合がおよんでいるため自然治癒しない可能性が高い条件であったが、矯正装置を使用することなく自然治癒に近い状態で被蓋改善を得るための咬合誘導ができたものと考えられる。しかしながら下顎前歯に叢生があるため今後も引き続き定期管理が必要と思われる。

【結論】

乳歯列期からの反対咬合においては定期管理を行い、早期に原因を発見して除去することが重要である。